和歌山県下における地域的巡礼地の展開過程と空間構造

Characterization on Development Process and Spatial Structure of Regional Pilgrimage Courses in Wakayama

近藤隆二郎*
Ryujiro KONDO

摘要：和歌山県下における地域的巡礼地を、資料調査、寺院アンケート調査、現地調査により把握した結果、88ヶ所関連が29件、33ヶ所関連を38件確認した。88ヶ所関連が県下全域に分布し、33ヶ所関連は田辺周辺と有田日高地域の2核に集積していることがわかった。江戸後期と昭和初期に開設ブームがあり、88ヶ所関連中心の紀北に対して33ヶ所関連中心の紀南という特徴が徐々に混乱するプロセスを明示した。ミニチュア巡礼地の空間構造としては、開空間・斜面立地型が比較的多く、閉空間・平面立地型や山岳信仰との関係を推測できる山越立地型・山頂立地型の存在が特徴的であった。集落空間モデルとの関係では、5パターンを提起した。

1. 目的

(1) 研究の背景

江戸時代を中心に四国88ヶ所や西国33ヶ所といった、容易に巡礼することのできない遠方の大霊場(本巡礼／全国的巡礼地)を身近な場に模倣して作り、特定の地域の人々に対して巡礼の機会を与えることを目的に開設された巡礼霊場を「地域的巡礼地」と呼ぶ¹⁾。地域的巡礼地はその規模により、「国巡礼地」「郡巡礼地」「都市巡礼地」「ミニチュア巡礼地」「建築内巡礼地」に分けることができる(表1)²⁾。現在でも信仰深い人々によって巡礼されているとともに、「接待」という外来者を迎える民俗も生き続けている。とくに、ミニチュア巡礼地は本巡礼を連想させる疑似空間である³⁾。

と同時に、集落の共演空間として外部との交流空間としての役割も果たしていることが明示された⁴⁾。都市巡礼地以上の規模の地域的巡礼地に関する全国的・地域的な分布状況は、塚田、中尾らの総覧⁵⁾、後藤、小嶋、田中、近藤らによる地域圏分布⁶⁾が記されてきたが、ミニチュア巡礼地も含めた多層的な地域分布はまだ把握されていない⁷⁾。

(2) 研究の目的

地域的巡礼地を史的にとらえるだけでなく、空間構造と社会構造とが総合補完的に密着している形態としてとらえ、その形態を支えていた仕組みを明らかにするための基礎的なデータとして、本研究は、和歌山県域における地域分布および発展過程の把握と共に、空間構造の類型化および維持主体としての地域集落との関連を総論的に考察することを目的としている。ミニチュア巡礼地空間の比較考察から特定の地方に共通する空間構造を抽出すると共に集落モデルとの関係も提起する。巡礼空間の設置には近隣集落との関係性が作用するために、民俗学等の空間認識モデルを用いてその関係性を類型化することは、巡礼空間生成の要因と象徴的意味を探ることを可能にし、その形態を支えて

いた仕組みを読みとる手がかりとなる。

2. 研究方法

(1) 調査研究の流れ

(i) 県下各市町村誌等の文献調査および県下全寺院アンケート等によるデータを整理統合し、和歌山県下地域的巡礼地一覧を作成。(ii) 一覧リストに基づき主要巡礼地フィールド調査を実施。(iii) フィールド調査終了時点で、リストを再構築し、全体的な傾向と共に特色、歴史的傾向、現状等を比較整理する。

(2) 和歌山県下巡礼地リストアップ調査

(i) 文献資料調査

和歌山県下各市町村の郷土史関係資料211冊強および巡礼研究資料等より、各市町村における地域的巡礼地の記述を整理し、33件の地域的巡礼地の存在を確認すると共に、関連史料を収集した。(ii) 和歌山県下全寺院アンケート調査

『和歌山県宗教法人名簿』⁸⁾ 記載の仏教系宗教法人1,612件を対象に地域的巡礼地有無を問う簡単なアンケート調査を実施した(H8.2)。名簿には兼務寺も多数含まれていたために表2のような回収率となった。

表－2 寺院アンケート実施結果

配布全数	1,612 通
未到着数	54 通 (受取人不明、無住、住所不明等)
回収数	323 通 (回収率 20.7%)
97 通	情報有り(回答した寺に巡礼地有)
43 通	他情報有り(他の巡礼地事例の紹介)
183 通	情報無し

た(表3)。都市巡礼地以上の巡礼地は寺院ネットワークであり、様相がある程度把握できるために実施していない。フィールド調査では、写真撮影・札所(ポイント)確認・調査カード記入・簡易ルート図作成等を行った。

表－3 実施したフィールド調査

[1]941021:下津町、有田市、吉備町、広川町／[2]941223:岩出町／[3]950121:大塔村／[4]960331:打田町／[5]961116-17:大塔村、本宮町、古座町、串本町、すさみ町、日置川町／[6]961120-21:有田市、金屋町、吉備町、下津町、海南市／[7]961219-20:高野口町、九度山町、橋本市、高野町、貴志川町、岩出町／[8]970106-07:美浜町、御坊市、川辺町、中津村／[9]970126-27:日置川町、白浜町、上富田町／[10]970321:田辺市、他／[11]970330:和歌山市、海南市／[12]970803-04:田辺市、串本町／[13]970905:広川町、湯浅町、清水町／[14]970920-22:南部町、新宮市、すさみ町、田辺市／[15]971005:金屋町(巡礼参加)／[16]971010-11:古座川町、串本町、田辺市
--

(3) フィールド調査

整理統合したリストを元に、地域別にミニチュア巡礼地を中心に現地を調査し

*和歌山大学システム工学部環境システム学科

3. 結果

(1) 和歌山県下巡礼地総覧／全体的構造の考察

(i) 紀伊国・和歌山県の地域構造

紀伊国／和歌山県は、山深い紀伊山地を中心とする山岳地帯であり、平野は河川流域以外にはほとんどない。この、山と川と海が織りなす風土の中で、古代・中世・近世を通じて宗教文化が著しく発展し、熊野参詣・高野詣で・西国33ヶ所巡礼に伊勢参宮もあわさり、一大聖半島となっていた。和歌山県は大きくは、紀北、紀中、紀南に文化圏は分けられ、紀北は紀ノ川を中心軸として、畿内と瀬戸内海、四国を結ぶ役割の地として発展し、山地である紀南との経済的地域格差を生み、人口分布や県民所得、教育、文化施設などにおいて北高南低型の特徴となっている。紀南は、むしろ関東との結びつきが強い。ここで、郡別の人口動向を参照すると、江戸時代の郡別村落数はほとんど変化無く、郡別では那賀郡と海草郡がやや多い程度ではほぼ同じであり、明治11(1878)年の人口でも郡別人口は海草郡がやや多い程度でそれほど差はない⁹⁾。ところが、各郡寺院の宗派別割合には地域差が大きい(図1)。『紀伊続風土記』(天保10年(1839)完成)と1994年の寺院宗派分布にはほとんど差が無く、天保時代には紀伊国の寺院分布はほぼ完成していたことがわかる。日高郡の寺院数が少なく、伊都・那賀・海草郡が多く、とくに伊都・那賀郡は高野山および根来寺の影響で圧倒的な真言宗地帯である。これに対して、海草・有田・日高郡は浄土宗・浄土真宗が比較的多い地域であり、牟婁郡は、臨済宗・曹洞宗が多い、と明確に特徴が分かれている。

図－1 郡別宗派別寺院数の比較

(ii) 地域的分散

調査により把握した和歌山県下の巡礼地リストを表4、表5に示す。88ヶ所関連の巡礼地(以下88ヶ所関連)と33ヶ所関連の巡礼地(以下33ヶ所関連)のもので、他巡礼地事例は省略している。規模別の巡礼地の分布からは、全国的巡礼地としては、88ヶ所関連はなく、33ヶ所関連か他であることがわかる(表6)。紀伊国全域を巡る国巡礼地としては、他が1のみだが、郡巡礼地は多い。都市巡礼地は少ない。最も数多いのはミニチュア巡礼地であ

表－4 和歌山県下地域的巡礼地(都市巡礼地以上)

	巡礼地の名称	設立年	西暦
全国的巡礼地	西国三十三ヶ所	平安時代	—
	新西国霊場	昭和7年	1932
	東海白寿三十三ヶ所観音霊場	平成3年	1991
	近西国三十三ヶ所(紀伊遠近三十三ヶ所)	延宝9年	1661
郡巡礼地	近郷西国三十三ヶ所(紀伊国三十三ヶ所)	文化8年以前	—
	紀伊八十八ヶ所(和歌山八十八ヶ所)	文化8年以前	—
	新紀伊四国八十八ヶ所(国四国)	文化9年	1812
	伊都郡四国八十八ヶ所	弘化3年	1846
	有田日高西国三十三ヶ所(国西国)	江戸時代	—
都市巡礼地	紀伊西国三十三ヶ所	昭和13年	1938
	和歌山三十三ヶ所	昭和初期	—

表－5 和歌山県下地域的巡礼地(都市巡礼地以上)

郡	市町村	巡礼地の名称	設立年	西暦	記号
伊都郡	高野口町	庚申山(高野口公園)三十三ヶ所	昭和16年	1941	A1
		庚申山八十八ヶ所	文化5年頃	1808	A2
	橋本市	学文路八十八ヶ所	天保3以前	—	A3
		学文路大師お砂踏み	平成4年	1992	A4
	高野町	高野山八十八ヶ所	昭和6年	1931	A5
		持明院八十八ヶ所	昭和55年	1980	A6
		持明院三十三ヶ所	平成5年	1993	A7
那賀郡	打田町	百合山八十八ヶ所	安政4年	1857	B1
	岩出町	根来八十八ヶ所	安政5年	1858	B2
		蔵王寺三十三ヶ所	?	—	B3
海草郡	和歌山市	大井寺三十三ヶ所	?	—	C1
	下津町	赤松山三十三ヶ所	天明5年	1785	C2
	海南市	浄土寺(日隈さん)三十三ヶ所	?	—	C3
		天寧寺八十八ヶ所	文化12年	1815	C4
		禅林寺八十八ヶ所	昭和5年	1930	C5
有田郡	清水町	大師堂三十三ヶ所	文政7年	1824	D1
	金屋町	五西月村新四国八十八ヶ所	昭和4年	1929	D2
	吉備町	井口大師山八十八ヶ所	文政2年	1819	D3
	有田市	愛宕山八十八ヶ所	文禄以前	—	D4
		辰ヶ浜三十三ヶ所	弘化3年	1846	D5
		御霊山三十三ヶ所	昭和16年	1941	D6
	湯浅町	勝楽寺八十八ヶ所	?	—	D7
	広川町	法蔵寺(観音山)三十三ヶ所	文化12年	1815	D8
		藤瀬不動尊三十三ヶ所	?	—	D9
	美浜町	入山の観音堂	?	—	E1
日高郡	川辺町	和佐(光性寺)八十八ヶ所	昭和13年	1938	E2
		矢田地蔵(地蔵山)八十八ヶ所	享和10年	1804	E3
		奄屋敷三十三ヶ所	?	—	E4
	御坊市	鳳生寺三十三ヶ所	?	—	E5
	中津村	上滝本四国八十八ヶ所	?	—	E6
		上滝本西国三十三ヶ所	?	—	E7
	南部町	千里観音堂三十三ヶ所	弘化2年	1845	E8
	大塔村	東の森八十八ヶ所	文化安政期	—	F1
西牟婁郡	上富田町	昭和園三十三ヶ所	昭和3年	1928	F2
		清水三十三ヶ所	天保5年	1834	F3
		生馬観音寺三十三ヶ所	昭和44年	1969	F4
		救馬溪観音三十三ヶ所	昭和41年	1966	F5
		救馬溪八十八ヶ所	平成2年	1990	F6
	田辺市	報恩山三十三ヶ所	昭和7年	1932	F7
		蔵倉山八十八ヶ所	文政3年	1820	F8
		三光寺(日立山)八十八ヶ所	昭和3年	1928	F9
		不動寺三十三ヶ所	江戸後期	—	F10
		善光寺三十三ヶ所	大正時代	—	F11
	白浜町	櫛西国(朝来婦)三十三ヶ所	昭和10年	1935	F12
	日置川町	天徳寺板東三十三ヶ所観音霊場	弘化3年	1846	F13
東牟婁郡		天徳寺秩父三十四ヶ所観音霊場	弘化3年	1846	F14
		海蔵寺・長寿寺八十八ヶ所	天保年間	—	F15
		久木徳清寺(八王子山)三十三ヶ所	天保8年	1837	F16
		吉祥寺三十三ヶ所	明治21年	1888	F17
	すさみ町	萬松山三十三ヶ所	安政2年	1855	F18
	串本町	南明山三十三所	昭和10頃	1935	F19
		風吹山八十八ヶ所	昭和13年	1938	F20
	古座町	重畳山八十八ヶ所	大正14年	1925	G1
		六勝寺三十三ヶ所	?	—	G2
		六勝寺八十八ヶ所	?	—	G3
新宮市	古座川町	大師山八十八ヶ所	寛政元年?	—	G4
		東仙寺八十八ヶ所	昭和3年	1928	G5
		東仙寺三十三ヶ所	昭和3年	1928	G6
	本宮町	果無越西国三十三観音	大正11年	1922	G7

設置年が厳密ではなく、推測を含むもの。

る。郡巡礼地以下(88ヶ所,33ヶ所)の分布を図示すると(表7図2),88ヶ所関連は県下全域に分布するが、その割合が多いのはやはり真言系の紀北である。湾岸地域における分布は、本巡礼である四国88ヶ所への近接感あるいは憧憬といった要素が働い

表－6 和歌山下巡礼地の規模・種別実数

巡礼地分類	88ヶ所	33ヶ所	他	計/実数(%)
全国的巡礼地	0(0.0)	3(25.0)	9(75.0)	12(100.0)
国巡礼地	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)	1(100.0)
郡巡礼地	3(37.5)	4(50.0)	1(12.5)	8(100.0)
都市巡礼地	0(0.0)	1(50.0)	1(50.0)	2(100.0)
ミニチュア巡礼地	26(28.0)	33(35.5)	34(36.6)	93(100.0)
合計	29(25.0)	41(35.3)	46(39.7)	116(100.0)

表－7 和歌山下地域的巡礼地の群域別実数
(郡巡礼地+都市巡礼地+ミニチュア巡礼地)

実数(%)	88ヶ所	33ヶ所	他	計
伊都郡	6(37.5)	3(18.8)	7(43.8)	16(100.0)
那賀郡	3(75.0)	1(25.0)	0(00.0)	4(100.0)
海草郡	3(13.0)	5(21.7)	15(65.2)	23(100.0)
有田郡	4(28.6)	6(42.9)	4(28.6)	14(100.0)
日高郡	3(30.0)	5(50.0)	2(20.0)	10(100.0)
西牟婁郡	6(22.2)	15(55.6)	6(22.2)	27(100.0)
東牟婁郡	4(44.4)	3(33.3)	2(22.2)	9(100.0)
合計	29(28.2)	38(36.9)	36(35.0)	103(100)

たのかもしれない。これに対して33ヶ所関連の分布は、田辺市、上富田町、日置川町を中心とする西牟婁郡が第一の核となっている。巡礼地数としても西牟婁郡は非常に多い。また、ややばらけるものの、有田日高地方にも第二の核があるとも言えそうだ。この二つの核以外では、あまり集約していない。海草郡・有田郡・日高郡は33ヶ所関連、88ヶ所関連とも同程度である。東牟婁郡もそれほど多くはない。また、内陸部(美山村、龍神村、中辺路町など)にはほとんど設置されていない。

(iii) 設立時期の考察

次に、各巡礼地の設立時期について設立時期が判明した事例をもとに考察を加える¹⁰⁾。本巡礼である西国33ヶ所は、だいたい

図－3 和歌山下地域的巡礼地年代別成立数
名称表記がある巡礼地がその期

間に開設されたことを示す。

①第Ⅰ期(～1811)：まずは、1595年以前に愛宕山88ヶ所(D4)が開設されていることに驚かされる。全国的な地域的巡礼地の歴史としても早い。33ヶ所関連では、1661年に近西国33ヶ所が紀南に開設されたのが最も早い。紀伊88ヶ所、近郷西国33ヶ所といった広域の地域的巡礼地が多い。18世紀後半から19世紀にかけての江戸時代村落は、近世の檀家制度の確立により、庶民が檀家寺院よりも現世利益のある人気の高い寺院へ集中し、寺側もさ

まざまな施策を考えた時期であり、その一戦略として地域巡礼地設置も位置づけることもできる。巡礼は庶民の信仰を兼ねた観光として憧れの行事であり、講で共同資金を貯めたり、「手形」を発行してもらって何とか可能になった時代であり、本巡礼帰りの者から巡礼地情報が入り、地域的巡礼地設立への原動力にもなった。

②第Ⅱ期(1812～1867)：「打ち壊し」や「一揆」が頻繁に起こり、幕藩体制が大きな動揺期に入った幕末期であり、不安的な気分は人々を信仰に向かわせた。文化・文政期は巡礼のピーク・観光化の時期であり、西国88ヶ所や西国33ヶ所は手の届く対象となった。紀伊国では、西国巡礼路であると共に、西国88ヶ所へ向かう巡礼数も全国屈指に多く、さらに西国巡礼後にお礼参りと称して高野山参詣も行うために、紀北は西国巡礼路でもあったため、著名度も相当なものだったと思われる。これは、県下の様々な地域で「接待講」が盛んであったこと¹²⁾からも伺える。この本巡礼ブームが地域的巡礼地設置にも拍車をかけ、多数の信者を集めることで裕福な財源を有し、信仰と金融を兼ね備えて運営されたりもした。この時期は、紀北は88ヶ所関連だけが設置された。88ヶ所関連は紀南でも開設され、全体的に要望があったものと推測される。33ヶ所関連は、日置川町・上富田町地域と有田市・広川町地域で核形成の萌芽をみることができる。

③第Ⅲ期(1868 明治維新～1917)：明治から大正にかけてのこの50年間は、西牟婁郡で吉祥寺33ヶ所(F17)のみの開設であり、低調であった。文明開化という大きな流れの中で、寺院は廃仏毀釈の洗礼を受け、各地で弾圧や売却の目にあった。巡礼という行為も忘れかけられた時期であり、盛んだった巡礼地もその多くが荒れてしまった。

図－2 和歌山下地域的巡礼地総覧図(記号は表5参照)

図-4 和歌山県下地域的巡礼地の開設状況(年代判別分)

④第Ⅳ期(1918～1945 第二次世界大戦終戦)：昭和初期から終戦までは第二次開設ブームである。好景気に支えられて事業家が多数輩出した時期であり、和歌山では鉄道が開設され、紀南までの交通がようやく確保された。庶民の暮らしも向上し、白浜温泉などが観光ブームとなった。明治期に廃れてしまった各巡礼地が再建されたのもこの時期である(百合山 88ヶ所(B1)や愛宕山 88ヶ所(D4))。紀北にも 33ヶ所関連が進出し、逆に紀中、紀南にも積極的に 88ヶ所関連が設置されていった。高野山麓の橋本市・九度山町にも紀伊西国 33ヶ所が開設された。33ヶ所関連は全県的に展開し、本宮町の果無越西国 33ヶ所(G7)のように内陸部にも設置された。

巡礼地間の相互関係を探る上で興味深いのは、明治以降三代にわたる名石工とされていた「橋一家」が「万呂三光寺八十八ヶ所仏像、三栖報恩寺三十三ヶ所仏像、稲成岩屋山三十三ヶ所仏像、湯崎千畳敷三十三体、椿三十三対等仏像二百数十体」¹³⁾を作成したという史実であり、確かに三光寺 88ヶ所(F9)、報恩山 33ヶ所(F7)、椿西国 33ヶ所(F12)はほぼ同時期に設置されている。

⑤第Ⅴ期(1946 終戦～1996)：1996 年までにも数は少ないもののミニチュア巡礼地は新設されている。ただし、88ヶ所関連では、開設された 3 つ全てが、本巡礼(四国 88ヶ所、西国 33ヶ所)から勧請した各札所の砂を一ヶ所に羅列し、信者にその上を歩かせる

「お砂踏み」の形態である。また、33ヶ所関連では、救馬溪観音と生馬観音寺にミニチュア巡礼地が設置されている。救馬溪観音は境内に多彩な施設が設置されて観光名所となっており、この時期に開設されたものは、いわば完全に寺主導で開設され、寺院の新しい集客装置として設置されていると言えよう。逆に、ぼけ封じ 24 地藏霊場といった新しい意味づけの全国的巡礼コースが増えてきており、他に該当する新しい巡礼の創設期にある。

つまり、和歌山県下の地域的巡礼地には、江戸後期と戦前に開設ブームがあった。一般的に地域的巡礼地は、国巡礼から郡巡礼、さらに小単位へと小型化しながら展開するとされており¹⁴⁾、和歌山においても若干その傾向は確認できる。郡巡礼地の多くが早期に設置されている。完全に小型化へのプロセスを区切るわけではないが、紀北では 88ヶ所関連に関して、また田辺周辺域では 33ヶ所関連に関して、広域から地域への展開を確認できる。

(2) 和歌山県下のミニチュア巡礼地

(i) ミニチュア巡礼地空間の立地環境

ミニチュア巡礼地の空間形態概念を表 8 にまとめ、対応する事例記号と一周時間を記した。運動概念は、回路(経路)の開閉によって大別でき、さらに経路形態によって「直線」「曲線」「ジグザグ」に分類できる。また、立地環境も「平面立地型」「斜面立地型」「山越立地型」「山頂立地型」に分けることができる。「集約」は、原型が事情により再編されたものがほとんどであることを考慮する必要がある。

集約型を除いて考えると、全体として開回路(曲線)・斜面立地のものが多い。和歌山県の地形自体が平野が少なく山と川に代表されることを受けているのだが、その多くは、眺望の開ける海や川に面した景観に配置されており、眺望ポイントにはベンチなどが設置されたりもしている。単に宗教的な装置というよりも、行楽的な意味合いも

大きかったものと思われる。眺望点を持つものの多くが、地元地域を見下ろすような視線であり、自地域のアイデンティティの確認もできたであろう。

平面立地型でお砂踏みや境内に並んでいるもの以外では、学文路 88ヶ所(A3)や和佐 88ヶ所(E2)のような開回路としてある程度の距離を持つものが特徴的である。ある領域を「囲む」ような経路を持つ。

また、五西月村新四国(D2)、果無越西国 33 観音(G7)、海蔵寺・長寿寺 88ヶ所(F15)など山越立地型は、札所間が非常に長く、峠越え的な長い経路を持つ。ミニチュア巡礼地群ではあまりないパターンである。海蔵寺世話人が「もともと真言宗系の修行僧の修行の場として設けられたのでは」と言うように、修行の場として設置された可能性も考えることができよう。とくに和歌山県の山間部は修験道が盛んであり、大峰山への講(山上講)も数多く存在していた。上滝本 88ヶ所(E6)世話人は、修験者として修行中は、毎朝裏山の 88ヶ所を数年間毎日巡ったという。これらのミニチュア巡礼地は、尾根筋や断崖に札所があり、老人や女性等に容易に巡礼の機会を与えるものとして設置されたとは考えにくい。

山頂立地型である大師山 88ヶ所(G4)と重畳山 88ヶ所(G1)は、石仏が山頂付近に並んでおり、そこまで険しい登山を続けなければたり着くことができない立地環境であり、より山岳信仰との

表－8 立地環境と運動形態からみた和歌山県下ミニチュア巡礼地の空間構造

立地環境	平面立地		斜面立地		山越立地		山頂立地	計
	33ヶ所	88ヶ所	33ヶ所	88ヶ所	33ヶ所	88ヶ所	88ヶ所	
運動形態								
	33ヶ所	88ヶ所	33ヶ所	88ヶ所	33ヶ所	88ヶ所	88ヶ所	
閉回路	曲線	[E1]2min. [F3]2min.	[A4]2min. [A6]20min. [E2]1hr.	[E5]1hr. [E3]30min. [F9]1hr.	【かこむ】			8
	ジグザグ		[A3]4.5hr. [F8]1hr.	[F4]20min. [F1]30min.	[F7]1hr.		[G4]30min.	6
螺旋		[F18]5min.	[D1]10min.	[D3]1hr.				3
開回路	直線	[A7]5min. [F10]20min.	[G5]10min.	[C2]10min. [E8]5min. [F2]30min. [G6]10min.	[F6]5min.	[G7]6hr.		9
	曲線	[B3]15min.	[C1]15min. [D6]1hr. [E7]20min. [F5]30min. [F11]30min. [F16]30min. [F19]30min.	[B2]2hr. [D4]1hr. [F20]40min.	[C4]2hr. [C5]1hr. [D2]3-4days [E6]1hr. [F15]4hr.		[G1]20min.	17
	ジグザグ		[A]40min. [F12]90min.	[B1]3-4hr.				3
集約		[D5]1min. [D8]1min. [F13]2min. [F14]2min. [F17]2min. [G2]2min.	[D7]2min. [G3]5min.	[C3]5min.	【ながめる】 【みちびく】		【やまごえ】	9
種別	12	8	17	9	2	5		
合計		20		26		7		55

※【詳細不明】…[A2][A5][D9][E4]【再編されたもの】…反転【再編の可能性が高いもの】…文字圏

べきは報恩山 33ヶ所(F7)や巖倉山 88ヶ所(F8)に顕著な奇岩や地形の利用方法である。報恩山では、地形の窪みを上手に利用して札所が設置され、巖倉山では、奇岩と札所が入り乱れてバラエティに富んだコースとなっている。奇岩を利用した『たいないめぐり』や『牛石』など興味深いポイントを見ることができる。また、百合山 88ヶ所(B1)は各札所を字単位や親族単位で保持し、その維持管理が非常に盛んであるために、各札所ごとに修理改修した形式を持っており、現在ではほとんどオリジナルの札所形式を判別できないほどである。

運動形態を種別でみると、88ヶ所関連に関しては、閉回路(9)と開回路(11)にあまり差はないが、33ヶ所関連に関しては、閉回路は少なく、あまり意識されていないことがわかる。これは、もともと本巡礼である四国 88ヶ所が四国を一周する閉回路であること、西国 33ヶ所が閉じていないことを受けていると思われる。立地環境で見ると、88ヶ所関連はバラエティに富んでいる地に立地しているが、とくに山越立地に 5件あるのが特徴的だ。入山の観音堂(E1)、清水 33ヶ所(F3)が再編成で集約された可能性が高いものとする、33ヶ所関連は斜面立地型が多いものの、集約されてしま

濃厚な関係が推測できる。

ポイントとなる札所形態の詳細な考察は別稿とするが、特質す

う傾向が強い。また、開回路で曲線が多いのは、「上昇」や「昇天」を象徴しているのかもしれない¹⁵⁾。

(ii)集落空間モデルにおけるミニチュア巡礼地

ここで福田によるムラの領域モデル¹⁶⁾を基礎として、集落空間モデルとの関係を考察する。村武による祭祀空間構造論¹⁷⁾も加味すると、三つの同心円として示される。第一の中心円が、居住空間としてのムラ<この世/内>であり、第二の空間は、居住空間としてのムラの周囲に展開する生産地としてのノラ<両義的境界/境>、その外側には、第三として採集地としてのヤマ<あの世/外>である。

詳細な各集落における個別論は別稿とするが、本調査で得られた空間構造とこの集落モデルとの関係を考察すると、表7のミニチュア巡礼地の空間構造分布からは、ミニチュア巡礼地と集落との典型的関係を次の5つにモデル化することができる。平面立地で閉回路の形態を①【かこむ】、斜面立地形態のうち、高台にポイントなどなく斜面に道をつくるものを②【ながめる】、高台の(聖)ポイントに向かう山道沿いに設置するものを③【みちびく】、山越立地形態を④【やまごえ】、山頂立地形態を⑤【まいる】に類型化することができる(図5)。①【かこむ】、②【ながめる】、③【みちびく】は、ムラとヤマとの境界に位置し、内(ウチ)と外(ソト)との媒介的な要素を持つことがわかる。境界的な性格は、結果とも呼ばれるが、区切ると同時につながりという両義的な性格を持つと形而上的に説

図－5 集落空間認識モデルとミニチュア巡礼地の関係パターン

明できよう。巡礼行為そのものが居住地を遠く離れて無縁化する非日常的な儀礼時空間であり、その行為を身近に模した巡礼地は、サカエムカエの儀礼のように、境界を意識させる装置であったのではないだろうか。これに対して、④【やまごえ】、⑤【まいる】は集落とは離れており、山岳信仰や修験道的な要素と結びついた修行的な側面あるいは遠隔参詣的な側面が強いと思われる。両義的な境界というよりは、むしろ＜外＞である異界における装置として考えることができる。

4. まとめと展望

本研究で得られた知見を以下にまとめる。

- ①和歌山県下における地域的巡礼地を、資料調査、寺院アンケート調査、現地調査により把握した結果、88ヶ所関連が29件、33ヶ所関連を38件確認した。
- ②地域分布傾向では、88ヶ所関連が県下全域に分布し、33ヶ所関連は田辺周辺と有田日高地域の2地域を核として集積していた。
- ③設立年を用いて展開プロセスを把握した結果、江戸後期と昭和

初期に創設ブームがあったことを確認し、88ヶ所関連が主要の紀北に対して33ヶ所関連が主要の紀南という展開が徐々に混在して乱立するプロセスを明記した。

④県下のミニチュア巡礼地の空間構造について比較検討した結果、開空間・斜面立地型が多く、他に閉空間・平面立地型や山岳信仰との関係を推測できる山越立地型と山頂立地型の存在が特徴的であった。また、多様な空間形態を持つ88ヶ所関連に対して、33ヶ所関連は上昇型が多いことを示した。

⑤集落の空間認識モデルとの関係では、ムラとヤマとの境界にある【かこむ】【ながめる】【みちびく】と、修験道的な【やまごえ】【まいる】に類型化することができた。

和歌山県下の地域的巡礼地の今後の課題は、(i)さらなる現状把握の必要性、(ii)地域的巡礼地間のネットワーク(協議会)形成、(iii)巡礼地空間の保全管理、(iv)地域コミュニティとの関係再構築、にまとめることができる。

本研究は、平成7-8年度「わかやま学」研究支援事業による援助を受けて行ったものである。ここに記して感謝の意を表す。

註および参考文献

- 1) 「写し霊場」は原型と模倣の関係性を指す概念で、主に88ヶ所関連が該当する。本研究では33ヶ所関連等も扱うため、空間規模から類型する概念である「地域的巡礼地」を用いる。
- 2) 田中による類型に「建築内巡礼地」を著者が付加した(田中智彦(1986):近畿地方における地域的巡礼地:神戸大学史学年報 1, 45-63)。
- 3) 近藤隆二郎(1993):北播磨のミニチュア巡礼地における空間体験構造に関する研究:造園雑誌 56(5), 247-252
- 4) 近藤隆二郎・盛岡通(1993):集落の「共演空間」に関する研究-北播磨のミニチュア巡礼地-:環境システム研究 VOL.21, 249-256
- 5) 中尾亮編(1973):古寺巡礼辞典:東京堂出版/塚田芳雄(1981):日本全国三十三・八十八所集覧:私家版/叢田宗慈他(1990):全国の霊場・札所・巡拝:ナンバー出版など。
- 6) 後藤洋文(1980):関東地方の新四国霊場:仏教と民俗 VOL.16, 13-35/小嶋博巳(1985):利根川流域の新四国巡礼-いわゆる地方巡礼の理解に向けて-:成城文芸, 113.114, 128-164/田中智彦(1986):前掲論文/近藤隆二郎(1995):江戸における写し霊場の鑑賞構造:造園雑誌 58(5), 161-164
- 7) 愛媛県史に「ミニ四国霊場と七か所参り」と題して小稿があり、ミニチュア巡礼地も含めて県下一覧が示されているが、リストのみで比較考察はほとんどない(愛媛県史編さん委員会編(1984):愛媛県史民俗下:愛媛県, 89-97)。また、藤澤による地域的巡礼地(ミニチュア巡礼地は含まれていない)の全国的設立状況の考察は非常に参考になるが、33ヶ所関連に限定されている点が残念である(藤澤典彦(1990):西国三十三所巡礼と石造遺品:浅野清編著「西国三十三所霊場寺院の総合的研究」所収, 187-194.)。
- 8) 和歌山県総務部(1994):和歌山県宗教法人名簿:和歌山県
- 9) 『天保郷帳』による群域別村数は、[伊都郡 147]を1とすると、[那賀郡 1.7][海草郡 1.4(名草郡+海士郡)][有田郡 0.9][日高郡 1.0][牟婁郡 3.0]であり、『近現代史料』による1878年人口は、[伊都郡 55,352]を1とすると、[那賀郡 1.0][海草郡 1.4][有田郡 1.1][日高郡 1.4][西牟婁郡 1.4][東牟婁郡 1.1]、1994年人口調査では、[伊都郡 103,194]を1とすると、[那賀郡 1.1][海草郡 4.6][有田郡 0.9][日高郡 0.9][西牟婁郡 1.3][東牟婁郡 0.7]である。
- 10) 設立時期が不明なのは、88ヶ所が3(10.3%)、33ヶ所が9(23.7%)、その他が36(78.2%)であった。
- 11) 1811(文化8)年は、巡礼地数の増加期初期であると共に、近西国33ヶ所と紀伊88ヶ所の記述がある『紀伊名所図会』の発行年であり、両巡礼地の成立年代の提示が可能な区切りの時期であるために用いた。
- 12) 接待講とは、西国八十八ヶ所へ船などに荷物を積んででかけ、遍路(巡礼者)に接待を施す民俗である。県下市町村誌から接待講について確認できた地域は、岩出町、野上町、吉備町、御坊市である。
- 13) 田辺市役所編集(1971):田邊市誌/下巻:同発行, 709pp.
- 14) 藤澤典彦(1990):前掲書, 191
- 15) 中村精二(1973):三十三ヶ所霊場の形状と空間について:日本建築学会大会学術講演梗概集, 1451-1452
- 16) 福田アジオ(1989):時間の民俗学・空間の民俗学:木耳社, 110
- 17) 村武精一(1984):祭祀空間の構造-社会人類学ノート-:東京大学出版会, 7-13

Summary: This research aims at grasping the whole lists of regional and miniature pilgrimage courses in Wakayama and clarifying the development process of the pilgrimage courses.

The result of the analysis is as the following. 1) There were 38 pilgrimage courses related to 33-kasho and 29 pilgrimage courses related to 88-kasho as a result of the literature investigations, the questionnaire for priests of the Buddhist temples and the field surveys. 2) The pilgrimage courses related to 88-kasho were distributed in the whole area, and the pilgrimage courses related to 33-kasho were concentrated to the two areas. 3) It was confirmed that there were twice foundation booms in 1800 and 1920. 4) There were many open-circuit type located on hillside as a result which was compared about the space structure of the miniature pilgrimage courses. The existence of long ridge route type and small course type located on the summit of mountain related with the Shugen-do is characteristic. 5) Relations between the miniature pilgrimage courses and the village space model could be put together in the 5 pattern; ① surrounding, ② overlooking, ③ leading, ④ climbing over and ⑤ ascending for pray.